

英会話ができて外国人の友達がいたらなあという気持ちを持つ大学生は多いと思いますが、大学で勉強する英語は必須科目のひとつで単位を取るためにしようがないもの、という意識が強い人も多いかと思います。また高校時代のように入試英語というはっきりした目的もなくなり、なんとなく授業に出て単位をとってという感じになる人もいるでしょう。

このような状況の中で、何を教えたらいいのか、ある種の格闘があります。Non-nativeの限界に突き当たりながら、私としては、違った文化、社会を知る経験作りになればと思っています。

私が担当している科目の1つに言語と文化という科目がありますが、そこで

はShall we dance? の日本語版と英語版を見ます。この映画はかなりのアメリカ人が知っていて、今年の夏も2人のアメリカ人の知り合いとこの映画の話をしました。私はアメリカ版の方が言いたいことがはっきりいえていて好きなのでそうしていました。ところが2人のアメリカ人は日本版の方がいいというのです。正直ちょっとびっくりしました。全てをはっきり言うアメリカ文化と比べて、はっきり言わない日本文化はいつも不利になって誤解を生みます。

- アカデミック イングリッシュ1・II
- 言語と社会
- 言語と文化
- 英語B1・B2

岡村 晃子

(おかむら あきこ)



1999年より高崎経済大学で英語を担当。それ以前は、1991年から1999年まで英国ニューカッスル大学で日本語専任講師。2000年にニューカッスル大学より応用言語学で博士号(Pr.D)取得。主な専門分野は学術論文分析、語用論。

私の知り合いはそのほうがいい時もあるというのです。“全ての気持ちを言葉には出来ないじゃあない。無理に説明しようとしなくてそのままにしておくほうが良いときもあるのよ。” アメリカ人にとっては日本版の寡黙さがとても新鮮だったようです。それに対して私には“You are the most important person in my life.” とはっきり言ってくれるアメリカ版がとても魅力的でした。外国語を学ぶとはいつもとは違った生き方を知ることでもあると思います。

ただ問題は外国語の学習が楽しくなるには、外国語をある程度知っていないと無理です。週に2回の英語の授業では限界があるかもしれません。英語を楽しむために授業で学習したことを基盤に英語に触れる時間を作って欲しいと思います。音楽、映画、TVを通して英語に触れる機会を作ってくれればなあと思います。きっと新たな世界が見えてきます。